ストック効果評価の理念と目的

パラオのカープ島に行ったときにジャングルの中に巨大な石のお金が転がっているのに驚いたことがある。カープ島に限らず、太平洋の島々にも同様の巨石の貨幣が眠っているという。持ち運びできるような代物ではない。このような大きく重い貨幣を何のために用いたのか謎である。貨幣が取引のために使われたのは商業が発達した中世以降のことだという。それにもかかわらず、物々交換が主体だった時代にも貨幣が存在した。貨幣は別の役割も持っていた。その１つがパシフィケーション（鎮魂）である。

部族間の間に争いが絶えなかった時代、ある部族が他の部族に対して償いをしないといけない事態が起こった。どうすれば、自分たちの償いの深さを理解してもらえるだろうか？重い石を運び時間をかけて細工をする。そのために必要な労働力をもって償いの気持ちの深さをシンボリックに表現しようとする。世界各地に残っている結納金という習わしもパシフィケーションの１つであるといわれる。新郎から新婦の両親に対する感謝の思いを表現するために出来上がった習慣である。

複数の人間が集まって部族やコミュニティを形成するためには、コミュニティーの共通の価値やメンバーの日々の活動の重要性を図る共通の物差しが必要だった。謝罪や感謝の気持ち、口では簡単に云える。しかし、その意味は具体的な行動や金銭の授受によりはじめて真剣に理解できるようになる。このような本音のコミュニケーションを行う手段、それが金銭の意味であり、パシフィケーションの目的であった。

しかし、人間同士が金銭の取引を行おうとすると、どうしてもコミュニケーションの中に本音が見え隠れしてしまう。そこで、あらゆる宗教をこえて、コミュニケーションの中で金銭のことを持ち出すことが、禁忌として、とらえられるようになってきた。だれも本音を他人に知られたくない。しかし、貨幣経済はそのような心情的な制約を超えて発達した。人類が貨幣を交換のために利用するようになった歴史は、たかだか1000年も満たないが、市場の発見により宗教や文化、価値観が異なる人々が財やサービスを平和的に交換できるようになった。

公共事業のストック効果の評価は、公共事業がもたらす金銭的、非金銭的な価値に関して行政と国民の間でコミュニケーションを行うための手段である。ストック効果の評価が必要となるのは、行政が非効率的な公共事業を実施する可能性があるためではない。公共事業に携わる関係者のたゆまない努力・研鑽を通じて、公共事業の非効率性を除去することは可能だろう。問題なのは、そう

京都大学 教授・土木学会 会長　小林（こばやし） 潔司（きよし）

した親密さのために、公共事業により生じる社会・経済の多様な変化、すなわちストック効果を、当然のことと考えてしまったり、場違いな技術論の中で理解してしまったりする危険性である。国民にとっては、技術論として論理的に一貫しているかということよりも、公共事業が経済性も含めて社会的に調和がとれているのかどうかが問題なのである。公共事業の内容がいかに優れたものであっても、それを関係者の特権的な知識として独占するのではなく、国民に対してその素晴らしさを説明し、理解してもらうことが必要である。このような社会的コミュニケーションに聖域があってはならない。

カールポッパーは社会を「開いた社会」と「閉じた社会」に区別した。開いた社会とは公的領域に関わる情報があまねく市民に公開され、個人や集団が地域の将来像に対する意思を自由に表明できる社会である。「開いた社会」と「閉じた社会」の本質的な違いは冒険を許容するかどうかにある。公共事業は社会資本ストックの蓄積を通じて社会に便益をもたらし、知的フロンティアの開拓によって社会の視野を拡大する使命を持っている。残念ながら、公共事業バッシングの実態を見れば、社会の将来像や知的冒険に関する健全なコミュニケーションが機能しているとは思えない。

社会資本は我々世代だけでなく、これから生まれてくる子供たちの世代にも役に立つ。公共事業には、いまの消費を切り詰めるという自己犠牲が必ず伴う。誰もが自分の消費ばかりを優先させる社会では社会資本ストックは蓄積されていかない。我々は、人類がこれまでに綿々と努力を重ねて蓄積した社会資本ストックから多くの恩恵を受けている。過去の人々が社会資本ストックを残した背景には、為政者であれ市民であれ、社会資本ストックを後世に残すことを「よし」とする社会的モラリティがあった。「人々の意思を実現する」ことは、「人々の欲望を満たす」ことではない。「誰かがやるだろう」と思う無責任な私意の寄せ集めに過ぎないとことから公論は生まれない。

公共事業に関する健全なコミュニケーションが成立するためには、情報の「送り手」と「受け手」の双方が一定の倫理観を身に着けていなければならない。このようなコミュニケーション倫理が確立するまでには、かなりの時間が必要だろう。当面の間、送り手の側からの一方的なコミュニケーション努力に終わるかもしれない。しかし、コミュニケーション努力が知的な誠意に動機づけられている限り、健全なコミュニケーションの実現が可能であろう。このような知的コミュニケーション技術としてのストック効果の評価の発展に期待したい。